

々は絶對必然的に深刻なる信仰より發す所の鮮明なる 智を保有せねばならぬ。

なんとなれば信なき淺薄なる智識を以て何んとして幽玄深妙なる宗教の本質を會得し得べしや、況や其除劣得勝おやである、探究に探究を重ねてしかも其一部でも窺ひ知ることを能はずして終に絶望の歎聲をもらすものは何れに基因するか、大に猛省しなければならぬ、吾人は宗教の本質を知らんとして汲々たる無信の學徒に對し木に依つて魚を求むるの言を呈したい、自覺せよ、江湖の學徒眞宗教の究竟を把握し破邪顯正の快腕を味わんとなら須く、圓滿なる智情意に根底する所の深刻なる信仰の獲得に向つて勇猛邁進すること最も急務なりとす、以上の如き信仰を學問の軌範とし成學を遂げんか、其學問は實に貴重な光輝ある活力ある働きとなつて社會を益し人類に幸福を與へること甚大なりと信ず、信仰確立すれば智識の散慢もな、勉學の中途にして遊惰放蕩に墮することも無いのである、従つて惡思潮に惑溺することもな

く泰然として東西文明を批判し斷乎として全宗教の歸趨を指示することが出來、始めて眞の宗教家たるの資格を誇るべきであると思ふ吾人は深く思ふ所あつて敢て學徒に此事を勸む。

聖誕の警鐘は鳴る

德 光 泰 良

時は北條氏畏れ多くも三上皇を三處に配流し奉り。皇國の神政を恣にせし吾國開關以來破天荒の大逆罪を犯し愚民爲めに其據る處に迷ひ夜打、強盜を是れ事とし、加ふるに善神此の國土を去りて天變、地妖、飢饉、疫癘交々來襲し其慘憺たるや實に鮮血滾々として流れて河を成し、死屍累々として積んで山を成し苦痛叫喚實に現世の地獄にあらずして何んぞ噫、是れ畢竟、北條氏の潜越、惡政に據ると雖ども斯く世法の混亂せしは當時の佛法及び僧侶の如何に誤り居りしか、如何に腐敗墮落せしか彼等僧徒の邪教は浮薄なる人心に流れ社

會に害毒を與へし事の甚大なるを追懷せば滿腔の悲憤一時に激發して禁ずる能はざるなり。嗚呼此の時此の土に大なる使命を帯びて降りし一個の傑僧あり、そも何者なるぞ。知らずや是れ空前絶後の聖人、上行の再誕、法華經の行者、吾人、人類を擧つて南無すべき一大救世主日蓮大上人なり矣。本年は其聖誕七百年の嘉辰を迎へたり。オ、生れ難き末法に生を受け、値ひ難き妙法に値ひ奉り而して又々此の聖紀に浴せし吾人等の幸福や如何に、歡涙滴下して思はず合掌せざるを得ざるなり然し乍ら此の聖紀を徒食無爲の裡に過し終るものあらば、そは祖意に稱はざるのみならず己が果報を失し悔みを千載に残すものなり。

見よ、今や社會は暗澹たる惡思潮の浸す所となり萬民、塗炭の苦しきあまり、始めて己が救はるゝ一路の光明を認め愚子の慈母に絶らんとする現狀に目覺めたり、而るに漫然たる我が宗門の僧侶は此の要求に満足せる救濟策を構じて彼れらを充分に救ひ得たりと云ふか否其成果の甚だ微弱なる

を見れば、人思はず切齒扼腕、天を仰ぎ地に伏して心に悶へ身を燒くの思をなす、奮起せよ聖祖門下の青年僧侶よ一天四海皆歸妙法の理想に生きたる吾等第二の宗門建設者よ慈眼視衆生福壽海無量の慈念に住して異体同心の祖訓を奉戴し相提携し相補翼して勇猛精進白刃前を厄くし砲聲後を衝くも神色自若として奮進し斃れて後己まん底の信念を以て弘經宣傳宗祖唯一の御理想たる一天四海皆歸妙法の實を擧ぐるこそ、聖誕の嘉辰に生れ會せし吾等佛子の本領又天業にあらずして何んぞや氏の英氣を把持し正義の爲めには生命を的に水火の難も恐れず此の使命を全うせるもの有りや、悲しむべし其甚だ僅少なるを。他日、全人類をして一齊に改革し世界的活動の花形は那邊に潜めるか第二の日蓮に俟たずんばあるべからず、第二の日蓮、そは吾人等青春燃ゆるが如き本化僧侶にあらずして何ぞ!! あ、うるはしき第二の小日蓮よ祖山の健兒は此の小日蓮の團體なり。數こそ多からざれ萬歲不朽の聖者日蓮の大靈に接し其信念を土臺とし

其誓願に生くる吾人等祖山健兒の小日蓮の力は偉大なり矣世界、何處にか我が敵ありや、二陣三陣續けよとの命令耳朶に響けり宗勢發展の有無は吾人等祖山健兒の雙肩にあり、オ、祖山健兒の任務や重且つ大なりと云ふべし。起てよ祖山の健兒聖誕七百年の警鐘を聞け。雄々しきかな祖山の健兒、聖誕の警鐘は亂打せり。

古きノートの中より

南陽 榮昭

私等が箇人として存在して行く上に、又社會の一人として生活して行く上に、其處に自我の尊崇と自己抑損即ち妥協との矛盾が生じて来る。それも自我的な人間と妥協性に富んだ者とに寄つて、從來其の主張を異にして居た。尊き箇性を飽くまで發揚すべきだと云ふ一派が有れば、或は共同の生活上場合によりては妥協せなければならぬと云ふ。惑はざるを得ない。

惟ふに自我尊崇は折伏主義ではあるまいか、そうして妥協は攝受主義でなければならぬ。宗祖一期の弘法は此の自我の發現に外ならなかつた。圓頂美衣、顔に慈悲の笑を堪へ生如來生阿彌陀と云はれし八宗の高僧然しながら汝に生命有りや、……自己柳損の生ける屍の集ひ。……我こそは眞に生ける東海の熱狂男子！眞に自我に生き得る道は此れと鎌倉の一隅に絶叫せられた宗祖は實に自我の活現の外に何者であらう。或は怒濤逆巻く日本の荒浪に、或は秋水の大刀の下に、そは尊き自我の發現に報はれたる神聖な迫害だつた。

自我發現と妥協とを更に語を更へて云へば類化と順應とも云へる。偉人は順應と同化と二者共に把つと云ふが、本化の自覺に立てる宗祖は二者の上に超越した或る衝動よりの力であつた。其處に本化自覺の價値が有り、絶對の信仰が力の根元である事を識り得るのだ。攝受も折伏も共に只單一として存在してはならない。同様に妥協も其れ自身であつてはならぬ、必ずや自我發現の爲の妥協